

第 39 回 福井県発掘調査報告会資料

— 令和 5 年に発掘調査された遺跡 —



2024

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

表紙写真

左上	大土呂遺跡 調査地遠景
左下	同 弥生土器出土状況
右上	滝見19号墳 石室完掘状況
右下	同 須恵器出土状況

みなみいなごえいせき 1 南稻越遺跡

所在地：あわら市稲越・伊井・池口

調査原因：北陸新幹線関連農道付け替え工事

調査期間：令和5年6月～9月

調査主体：あわら市教育委員会

調査面積：738 m²

時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古代、
中世



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 南稻越遺跡は、竹田川と高間川との合流地点近くに位置します。調査地は2区に分かれ、ともに県埋文が北陸新幹線建設に伴って発掘調査した箇所に隣接し、A区は平成28・30年度調査地の西側、B区は平成27年度調査地の東側にあたります。また、B区北側は、平成5～6年度に旧金津町が交差点拡幅に伴って発掘調査した地点と接します。

主な遺構 A区は、長さ約120m、最大幅約2.5mと細長い調査区で、遺構面を上下二面で検出した箇所も存在します。明確な建物跡は検出されず、土坑3基、溝跡21条などが確認されました。B区は、長さ約60m、幅約5mのL字状の調査区で、3間一列分の掘立柱建物跡と思われる柱穴跡を検出しましたが、規格や規模は確定できませんでした。他に、以前の調査で検出した溝跡と繋がる溝1なども確認しています。

主な遺物 出土遺物は、A区でテンバコ17箱、B区で同2箱でした。主に、弥生時代後期の弥生土器片と古墳時代の土師器片、奈良・平安時代の須恵器が多く、他に土錘や中世の越前焼片がありました。高間川対岸に位置する伊井遺跡で数多く発見された玉作り関連の遺物は、ほとんど出土しませんでした。

まとめ 今回の調査で、A区では遺構面を二面確認しましたが、遺物の出土状況から明確な時期差は窺えませんでした。そのため、過去の開発等により、遺物が移動した可能性も考えられます。これまでの調査知見と同様に弥生時代後期から古墳時代前期、古代、中世と断続的に営まれた集落跡と考えられます。 (橋本幸久)

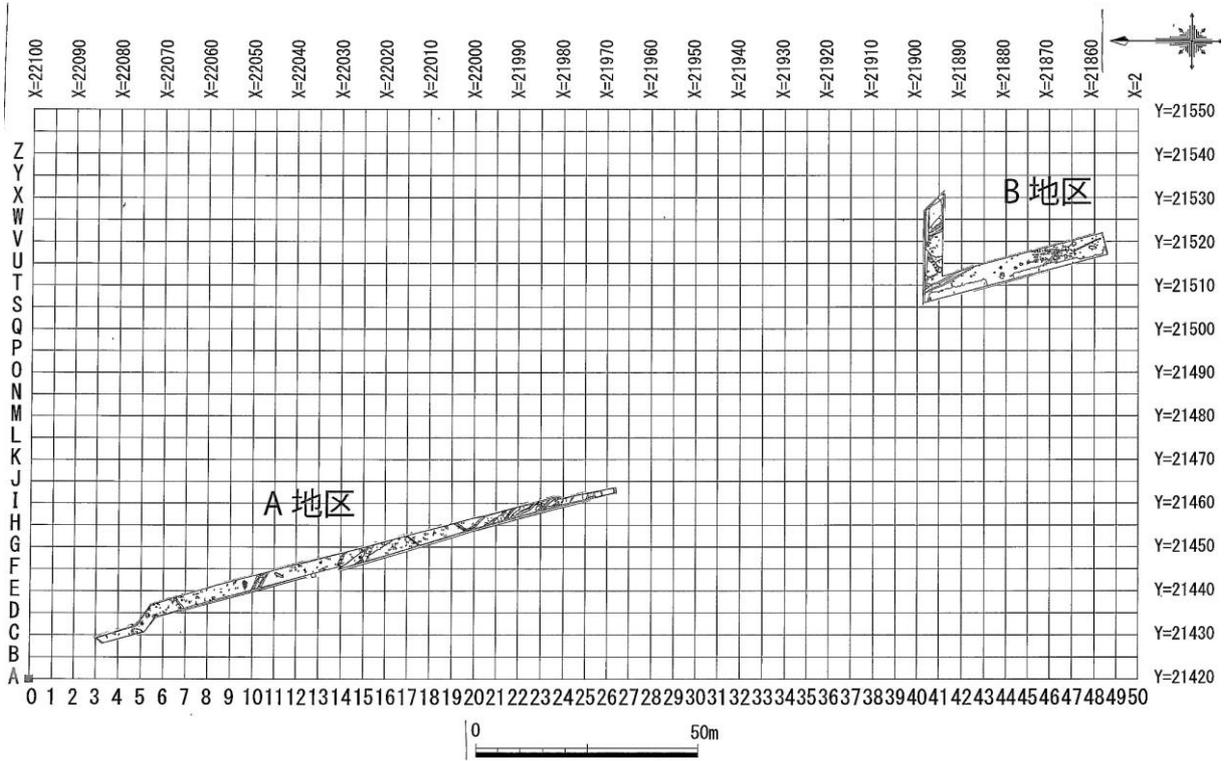


図1 A・B調査区位置図



写真1 A区北端、下層土坑1 検出(東から)



写真2 A区溝8内下層土器検出(東から)



写真3 B区北西部溝跡検出(北から)



写真4 B区北西部溝跡掘削後(北から)

ふくいじょうあと 2 福井城跡

所在地：福井市大手2丁目

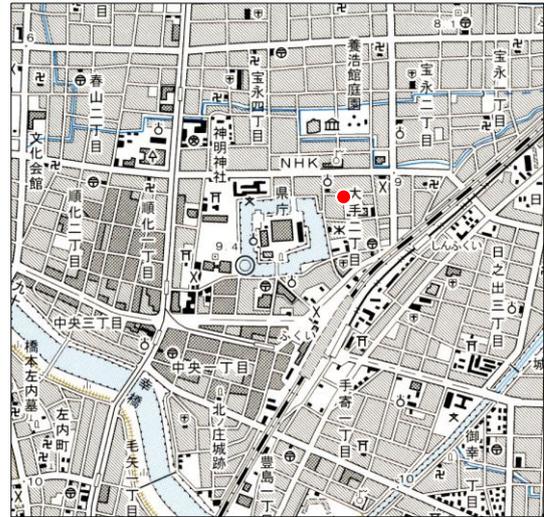
調査原因：マンション建設

調査期間：令和5年10月～12月

調査主体：福井市教育委員会

調査面積：558 m²

時代：近世



位置図 (S=1/25,000)

遺跡について 福井城は、徳川家康の次男である^{ゆうきひでやす}結城秀康が越前に入国した慶長6年(1601)から6年の歳月をかけて築られました。

調査地は福井城本丸(現在の福井県庁)の東側、「東三の丸」に位置します。この場所は、築城当初は武家屋敷として使用されていましたが、幕末には藩校「^{めいどうかん}明道館」や藩主の住まいである「^{ござしよ}御座所」が設けられていました。また、明治26年(1893)には松平試農場が創設され、福井県の農業振興の拠点となっていました。

主な遺構 福井城の遺構面は、明治期の松平試農場の影響やその後に建てられた建物などによって削られている状況でした。検出した主な遺構としては、幕末のものと考えられる柱穴やゴミ穴などが挙げられます。柱穴は調査区南側の一面に比較的集中して見つかりましたが、建物を復元するには至りませんでした。ゴミ穴は比較的規模が大きく、南側から廃棄されていた状況がうかがえました。また、調査区の北隅では人頭大の笏谷石が集中的に出土するなど、三の丸石垣の裏込め石の可能性がります。その他、下層で中世の遺構が見つかっています。

主な遺物 遺物のほとんどは、ゴミ穴からの出土になります。主な遺物として、越前焼陶器、肥前系磁器類、かわらけ、漆椀や箸などの木製品類、笏谷石製品が出土しています。珍しいものでは獣骨が出土しました。(白崎一夫)



图1 福井分間之図（1811）※抜粋 「松平文庫（福井県文書館保管）」



写真1 1区全景



写真3 2区全景



写真2 ゴミ穴（1区）



写真4 石垣裏込め（2区）

3 おおどろいせき 大土呂遺跡

所在地：福井市大土呂町

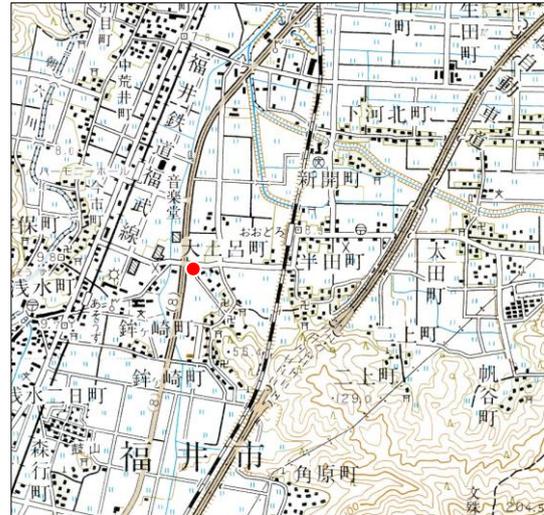
調査原因：主要地方道清水美山線道路改良工事

調査期間：令和5年5月～8月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：290 m²

時代：弥生時代、古墳時代、奈良時代、
平安時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 大土呂遺跡は、福井平野の南東部にあります。これまでも、平成5年の国道8号福井バイパス改良工事によって発掘調査がおこなわれ、弥生時代から古代にかけての遺構や遺物がみつかりました。今回の調査は、国道に交差して東西にのびる県道の道路改良工事に伴うものです。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構や遺物、古代（奈良・平安時代）の遺構や遺物を確認しました。

主な遺構 大土呂地区における昔のくらしぶりを示す遺構がみつかりました。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての主な遺構として、^{たてあな} 竪穴建物（SI1）と溝（SD11）があります。竪穴建物（SI1）は、北半分が調査区外ですが、1辺5mほどの方形の平面形だと考えられます。溝（SD11）は幅3m弱で、生活空間としての集落のまわりを区切る溝だったと考えられます。さらに西側には、^{どこうぼ} 土壌墓の可能性のある複数の土坑を検出しました。生活空間の外側に死者の空間があったのでしょうか。いずれの遺構も、弥生時代終末から古墳時代初頭ごろのものでした。

古代の主な遺構は、竪穴建物（SI2）および井戸（SE1）です。竪穴建物（SI2）は、幅4mほどで、床面近くに炭が堆積しており、作業場のような使われ方をした建物だと考えられます。井戸（SE1）は、この竪穴建物に隣接する素掘りの井戸です。下層の埋土からは、建物より前の時期の須恵器が出土しました。このことから、竪穴建物の時期には、井戸は埋め立てられていたと考えられます。

主な遺物 いにしえより交流の結節点であったことを示す遺物がみつかりました。

〔弥生時代から古墳時代〕 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器（壺、甕、^{たかつき}高杯、

器台、蓋、小型精製器種）が多く出土しました。特に、主な遺構でも示した溝（SD11）や土坑からは、様々な種類の弥生土器や古式土師器こしきはしきが出土しました。この中には、北陸地方の特徴を示す土器だけでなく、近畿地方や山陰地方の特徴を示す土器も含まれています。

〔飛鳥時代から平安時代〕 須恵器すえき（蓋杯ふたつき、甕かめ、椀わん）と土師器としいし（甕）、砥石の可能性のある石製品などが出土しました。調査面積あたりの出土量は比較的多いといえます。

なかでも、「青野型甕あおのがたかめ」という土師器の甕が注目されます。京都府北部（丹波）もしくは福井県南部（若狭）から移住してきた人々が持ち込んだ炊飯具だと考えられます。

なお、本調査の後に行われた工事立会調査こうじたちあいちょうさでも、多くの遺物が出土しました。弥生時代から古墳時代の土器も多いのですが、平安時代ごろの須恵器が溝から多量にみつかりました。この中には、墨で文字が記されたもの（墨書土器ぼくしよどき）も含まれています。

まとめ 大土呂遺跡は、これまで全体像がはっきりしていませんでしたが、今回の発掘調査によって、多くのあらたな事実がわかりました。

この遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけてと、飛鳥時代から平安時代にかけての2つの時期に、人々の活動が活発となります。この時期、「遠く離れた地方との交流」や「外部からの移住・定住」が活性化したのが大きな原因だと考えられます。これらは、日本列島を広くおおう、大きな時代のうつりかわりのひとコマだったのでしょう。

今回見つかった遺構や遺物には、「北陸での古墳時代のはじまり」や、「律令国家の地域経営のありかた」といった、大きな発見につながる資料も含まれているのかもしれませんが。今後は、出土したさまざまな資料を分析し、発掘調査報告書を作成する作業の中で、埋蔵文化財の活用を図っていく予定です。（菅原瑞穂・魚津知克）



図1 調査区全景（南から）



図2 竪穴建物（弥生～古墳）（東から）



図3 溝 遺物出土状況（北から）



図4 古代土器出土状況（東から）



図5 井戸（北から）



図6 器台出土状況（南西から）



図7 溝西側 土坑 甕出土状況（北東から）

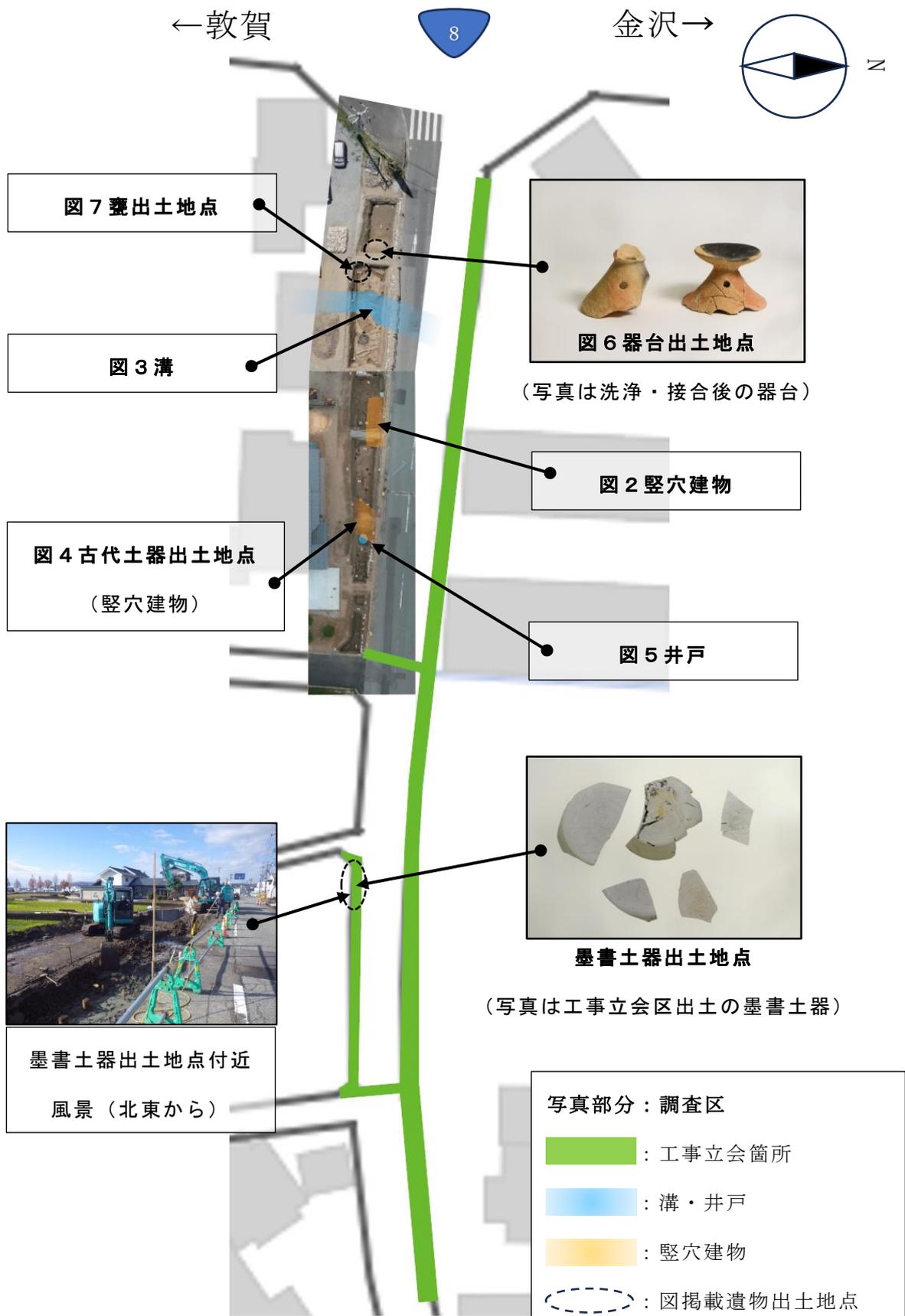


図8 調査区及び工事立会箇所

とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
4 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡

所在地：福井市東新町

調査原因：史跡整備（第155次）

調査期間：令和5年9月～令和6年1月

調査主体：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

調査面積：1,100 m²

時代：室町時代（戦国）



位置図（S=1/50,000）

遺跡について 一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏の城下町の跡です。当時の城下町が遺跡としてまると残る貴重な例で、国の特別史跡に指定されています。

一乗谷朝倉氏遺跡博物館では、遺跡を保護し多くの人に知ってもらうために、50年以上にわたって発掘調査と整備を続けてきました。令和5年度からは、上城戸跡という城下町を守る防塁のすぐ外側、合計 4,000 m²の範囲を継続して調査することになりました。今回ご紹介するのは、このうち、初年度の 1,100 m²分の内容です。

主な遺構 調査区は、中央を横切る土塁により、上段（山側）と下段（川側）に区画されていて、下段はさらに石列により区画されていました。

土塁の両側の裾の石積が残っていて、川側の裾には石組溝も見られました。土塁の途中には、上段と下段をつなぐ階段があり、階段を登ったところには門の礎石が、その先には砂利敷きの通路が続きます。このほか、下段で石積施設を確認しました。

なお、遺構には、上城戸跡に並行するものと斜交するものがありました。

主な遺物 室町時代の物が中心です。素焼きの皿や越前焼の甕・^{かめ}搦鉢、^{すりばち}瀬戸美濃焼の碗や皿のほか、青磁や白磁・染付の碗・皿・^{しゅかいこ}酒会壺（^{ふた}蓋）といった海外産の陶磁器や、溶けた鉛や弾丸、^{よろいかなぐ}鎧金具といった金属製品、ガラス片などが見つかりました。

当時珍重された酒会壺やガラスが見つかったことから、そうした物を持てる身分/使う身分の人がいたことが推測できます。同様に、弾丸や鎧金具からは武士がいたことが推測されます。こうした遺物や遺構から総合的に判断すると、上城戸跡の外側はかつて上級の武士の屋敷であったと推測できます。（吉田悠歩）



写真1 調査区全景 南から



写真2 土塁・石組溝・門砂利敷 南から



写真3 石列・石積施設 北から



写真4 主な遺物

5 すぎ はないせき 杉の花遺跡

所在地：丹生郡越前町織田

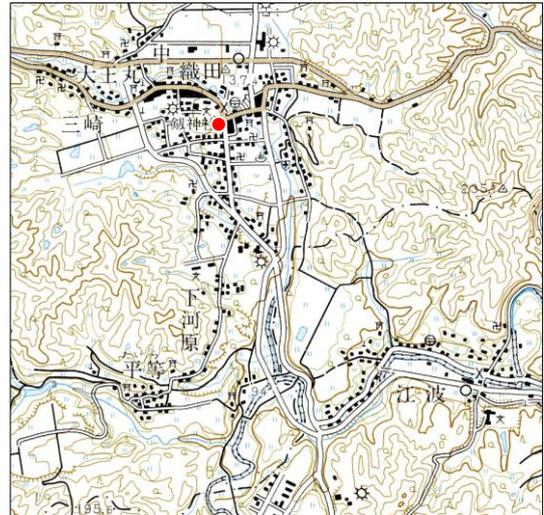
調査原因：劔神社社務所再建設

調査期間：令和5年6月～12月

調査主体：越前町教育委員会

調査面積：375 m² × 4面

時代：奈良時代～近代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 当遺跡は越前二の宮・劔神社の境内に位置し、丹南盆地など内陸部を結ぶ交通の要所にあたります。平成22年度より6次にわたる発掘調査が行われ、水路状遺構や溝状遺構などが検出され、弥生時代中期の甕型土器や奈良～江戸時代にかけての須恵器・土師器・陶磁器などが大量に出土しています。

今回は劔神社社務所の建設に伴って発掘調査を行いました。調査の結果、遺跡は12世紀後半を中心とし、少なくとも8世紀末から近代にかけて境内地で社殿などの整備が進められていったと考えられます。

主な遺構 礎石建物4基、溝状遺構2条、柱穴群、土坑11基などの遺構を確認しました。調査区北側からは室町時代の礎石建物1基、12世紀後半の^{きだん}基壇をもつ礎石建物2基が検出され、基壇盛土中に6m×10mの範囲にわたる土器だまりを確認しました。土器だまりは12世紀後半を中心とする1,000個体以上の^{はしき}土師器を含み、下部に土師器甕1点や^{かぎ}鉤状鉄製品1点が安置されていました。このほか柱間2.8mを測る大型礎石建物、長さ13m以上・幅0.5m・深さ0.5m以上を測る溝、神社境内東側を区画する二重の塀列とみられる柱穴や、^{じちん}地鎮に伴う土坑群も発見されています。

主な遺物 土師器（土師器皿・^{ちゅうじょうこうだい}柱状高台）・^{すえき}須恵器・陶磁器（青磁・白磁・越前焼）・鉄製品（鉄板・釘・鉤）・玉製品（^{じゆず}数珠）などが出土しました。とくに地鎮とみられる土坑からは土師器碗・土師器^{すいびょう}水瓶・鉄板の組み合わせが出土し、鉄板には五穀と考えられる穀物の痕跡が認められます。土器だまりは下層の礎石建物を封じ込めるかのように構築されており、なんらかの宗教儀礼に伴う可能性もあります。（菱田百花）



調査区全景（第1遺構面）



礎石建物（第1遺構面）



土器だまり（第2遺構面）



土師器甕出土状況（第2遺構面）



調査区全景（第4遺構面）



地鎮 土師器出土状況（第4遺構面）



地鎮 鉄製品・土師器出土状況（第4遺構面）



穀物の痕跡が認められる鉄製品

6 国府遺跡

所在地：越前市国府1丁目

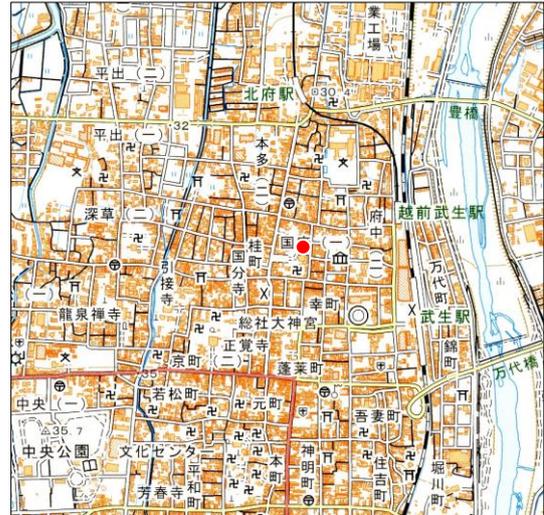
調査原因：学術調査

調査期間：令和5年9月～11月

調査主体：越前市教育委員会

調査面積：127 m²

時代：平安時代



位置図 (S=1/25,000)

遺跡について 国府遺跡は、越前国府の推定域内に位置する遺跡です。過去の発掘調査では、国府B遺跡にて石製巡方（帯に付ける飾り）^{せきせいじゆんぽう}が出土しており、今回の調査地はその南側にあたります。また、調査地は本興寺^{ほんこうじ}の境内にあたり、齋藤優氏^{さいとうまさる}の説では越前国府の国衙^{こくが}の有力地とされています。

主な遺構 調査区北側に柱穴が集中しており、中央には溝が2条ありました。幅2m50cm、深さ70cmほどの溝は、埋土から平安時代前期（9世紀後半）ごろの緑釉陶器^{りよくゆうとうき}や須恵器^{すえき}、土師器^{はじき}などが出土しています。また、東西方向の正方位に向かって走っていることから、国府に関連する施設の区画溝の可能性ががあります。もう一条の溝は幅65cm、深さ25cmで、区画溝の南側に平行に走っており、この溝からは遺物が集中して出土しています。

調査区北側に位置している土坑^{どこう}からは、須恵器や土師器などが完形の状態で出土しています。また、南側には石を伴う穴が検出され、その隣からは灯明皿^{とうみょうざら}が完形で10個以上重なるように出土している長方形の土坑があります。

そのほか、江戸時代の井戸が木枠を残した状態で検出されています。

主な遺物 出土量はコンテナ20箱分でした。平安時代の遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器^{かいゆうとうき}、灰釉陶器^{にさいとうき}、二彩陶器が出土しています。器種は、土師器は椀、皿、須恵器は、甕、坏蓋、坏身、高坏、緑釉陶器は、椀、三足盤^{さんそくばん}です。また、墨書土器^{ぼくしょとうき}が出土していますが、破片のため文字の判読はできませんでした。

また、近世以降のかわらけや陶磁器なども出土しています。 (西脇菜々)

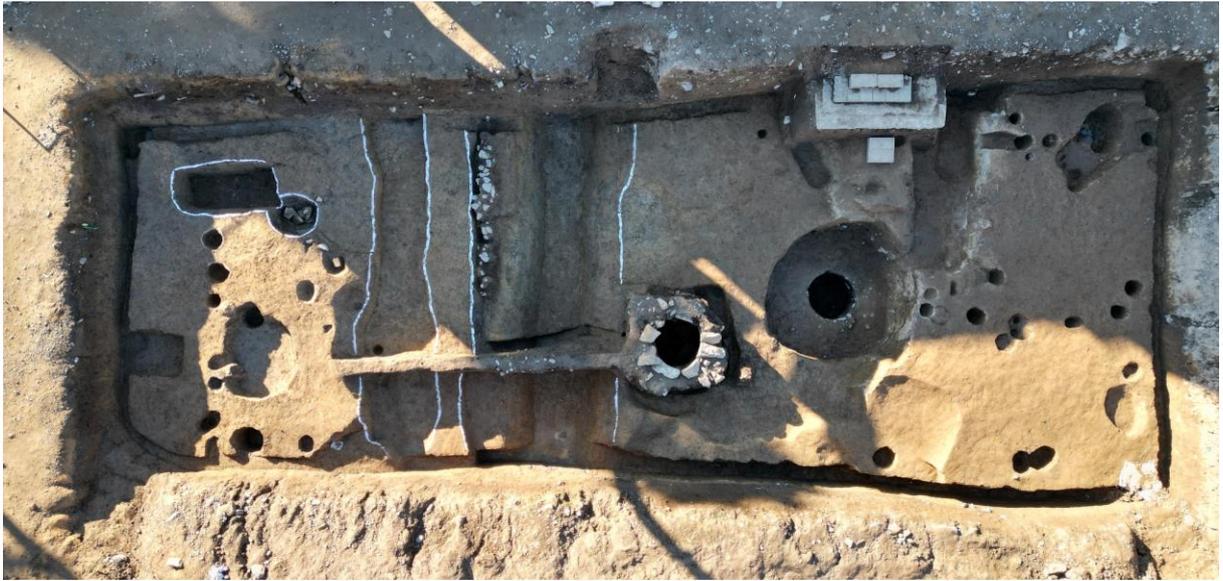


写真1 調査区全体写真（右が北）



写真2 溝（東から）



写真3 灯明皿出土状況（土坑）



写真4 石を伴う穴



上から



横から

写真5 緑釉陶器 三足盤

7 たきびこふんぐん 滝見古墳群

所在地：大飯郡おおい町野尻

調査原因：舞鶴若狭自動車道大飯高浜 IC～
小浜西 IC における付加車線事業

調査期間：令和 5 年 5 月～ 8 月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：950 m²

時代：古墳時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 滝見古墳群は、野尻集落^{のしり}の南東にある山林の東側斜面に位置します。

昭和 34 年 (1959) に同志社大学^{どうししゃ}によって分布調査が行われ、3 基の古墳が発掘調査されました。昭和 53 年 (1978) には圃場整備^{ほじょう}に伴い、おおい町教育委員会 (旧大飯町教育委員会^{おおいちょう}) によって 1 基の古墳が発掘調査されました。舞鶴若狭自動車道の建設に伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが試掘調査を行ったところ、用地内に 3 基の古墳 (18・19・20 号墳) があることがわかり、平成 9 年 (1997) に 20 号墳の発掘調査を行いました。このたび舞鶴若狭自動車道の複線化に伴い、18・19 号墳の発掘調査を行いました。

主な遺構と遺物 古墳 2 基 (18・19 号墳) と石組遺構 1 基を確認しました。

18 号墳は、径約 7.5m を測る円墳です。埋葬施設は横穴式石室^{まいそうしせつ よこあなしきせきしつ}です。石室の玄室^{げんしつ}は未盗掘^{みとうくつ}のため、石室の奥壁^{おくへき}の前には須恵器^{すゑ}の杯^{つぎ} 2 点^{つぎ}がもとの状態のままで見つかりました。石を積んで石室を塞いだ^{ふさ}ところや石室の入口付近からは、複数個体の須恵器や土師器^{はじき}が見つかりました。古墳の盛土^{かめ}の中からは須恵器の甕^{かめ}が見つかりました。18 号墳は石室内から出土した須恵器から、7 世紀中頃に造られたと考えられます。

19 号墳は、径約 9.6m を測る円墳です。埋葬施設は横穴式石室^{まいそうしせつ よこあなしきせきしつ}です。19 号墳も玄室^{げんしつ}は未盗掘^{みとうくつ}でした。床が 2 面あることから、埋葬は 2 回行われたと考えられ、最初に埋葬された面からは、液体を注ぐための孔をもつ須恵器の壺 (ハソウ) 1 点^{つぎ}が、2 回目に埋葬された面からは鉄刀^{てつとう} 1 点と須恵器の杯^{つぎ} 2 点^{つぎ}が見つかりました。19 号墳は石室内から出土した須恵器から、6 世紀中頃～後半頃に造られたと考えられます。

まとめ 横穴式石室の2回目の埋葬は、入り口から行われるのが一般的ですが、19号墳では、奥側の天井石を外して2回目の埋葬を行った可能性が高いことが判明しました。若狭における古墳時代後期の横穴式石室の特殊な埋葬方法が明らかとなり、貴重な成果を得ることができました。 (中島啓太)



写真1 18号墳石室検出状況
(南東より)



写真2 19号墳石室検出状況
(南東より)



写真3 滝見18・19号墳丘検出状況(南より)



写真4 19号墳石室内遺物出土状況(南東より)



写真5 19号墳石室内鉄刀出土状況

いしやまじょうあと 8 石山城跡

所在地：大飯郡おおい町石山

調査原因：範囲確認調査

調査期間：令和5年4月～令和6年3月

調査主体：おおい町教育委員会

調査面積：450 m²

時代：中世



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 石山城跡は、石山集落背後の標高 190mの山上に展開する山城です。主郭からは左分利川上・中流域一帯を一望でき、県道小浜綾部線と県道坂本高浜線が交差し、この地域を支配するうえで重要な場所に築かれています。本調査は、石山城跡の保存活用と将来的な整備の可能性を探ることを目的とし、令和5年度で5年目の調査となります。令和5年度は、範囲確認と主郭南東側尾根上に位置する堀切を中心^{しゆかく}に確認調査を行いました。

主な遺構 今回調査を行った堀切は、主郭南東側尾根上に位置する2条の堀切のうち、主郭に近い高所の堀切を調査しました。現在残る石山城跡の堀切の中で最も規模の大きな遺構です。堀切は尾根の急斜面を利用し、地山を垂直に近い傾斜で削り出して造られており、調査ではどの部分から堀切を造ったのかははっきりしませんでした。調査範囲から推測すると底面まで約 10m、下側上端面からは約 4.5m、堀切底部は平らで幅は約 1 mあり、V字状となっています。その他、堀切の中央部で土橋状^{とばし}の遺構を確認しました。堀切底部から土橋状の上端まで約 2 mあり、ほぼ垂直に地山を削り成形していることから容易に登ることはできないものと考えられます。どのような意図で造られたのかは現時点でははっきりとしません。

令和元年度から継続して行ってきた発掘調査は終了し、今後は遺物や凶面整理、遺跡及び遺構の検討を行いながら調査報告書の作成を進めていく予定です。

主な遺物 堀切からの遺物の出土はありませんでした。 (舟澤朱音)

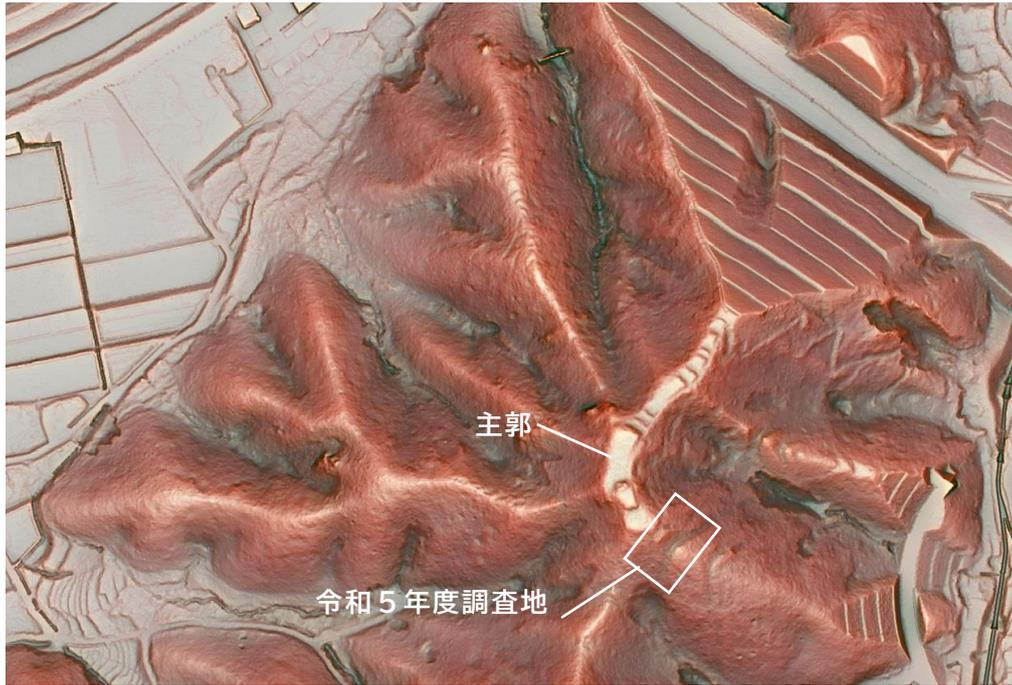


図1 令和5年度調査位置図



写真1 堀切 調査前



写真2 堀切 調査前



写真3 堆積状況 調査後



写真4 土橋状遺構 調査後

第 39 回 福井県発掘調査報告会

日 時：令和 6 年 7 月 28 日（日）午後 1 時～午後 4 時

会 場：福井県立図書館 多目的ホール

主 催：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

プログラム

- ・開会あいさつ
- ・発表 1 特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 第 155 次調査
吉田 悠歩（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館）
- ・発表 2 大土呂遺跡
菅原 瑞穂（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）
- ・休憩
- ・発表 3 滝見古墳群
中島 啓太（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）
- ・発表 4 国府遺跡
西脇 菜々（越前市生涯学習・芸術文化課）
- ・休憩
- ・発表 5 杉の花遺跡
菱田 百花（越前町織田歴史文化館）
- ・質疑応答
- ・閉会あいさつ

第 39 回 福井県発掘調査報告会資料

— 令和 5 年度に発掘調査された遺跡 —

令和 6 年 7 月 日 印刷

令和 6 年 7 月 28 日 発行

発 行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

